箕面一中PTA新聞

創刊号
発行者　PTA
箕面一中印刷所
社会版　孔中　豊

発刊に当って

PTA会長　木村慎一

PTA新聞がいよいよ発刊されることになりました。PTAで新聞を発行したいという話は従来からも色々と考えられていたようですが、なかなかその実現には踏み切れなかったようです。ところが、本年度の総会においては、PTA活動のあり方に関連して会員の方々より活発な御意見が出され、引き続いて開かれた運営委員会でも、総会に出された御意見をどのように実現していくかということが中心議題となりました。従来の運営委員会中心のPTA活動はとかく会員の意思と離れがちになり、ひいては、PTA活動として好ましくないことになるのではないか、小学校時代とは異なって子供の勉強も一段とむずかしくなり、また思春期をひかえた子供の取り扱いのむずかしさ、さらに、子供の将来にかかわる進路、進学の問題など、父兄は一人の子供の親としてだけでは解決できない色々の問題にぶつかることになります。このような問題の解決のためには、どうしても、父兄と先生、さらに父兄相互の話し合いの場が必要となるわけです。ということで一方では地区を中心に直接会員相互が話し合いの機会を持ち、他方では新聞を通して会員全体の意思の疏通を計ろうということになりました。

右のようないきさつで、PTA新聞の発行が決まったわけでありますが、いざ発行しようと思っても一中PTAには特に事業活動を行なうための専門委員会もありませんので、運営委員会では、比較的会員の皆様と接触の多い学級委員長さんに新聞発行のための調査と準備をしていただくことになりました。そこで早速オール学級委員会におはかりいただき、本年度は差当って各学年からそれぞれ三名の編集委員が決まり、色々と編集上の御相談をしていただくことになりました。

このようにして、一中PTA新聞の創刊号が発刊のはこびとなったわけでありますが今後この新聞が充実したものとなり、意義あるものになるかどうかは、学校側の御支援と、我々会員の努力にかかっていると思います。編集委員がどんなに努力しても会員の御協力がなければ意味のないものになってしまいます。今後、編集委員会の構成をどうするか、どのような内容の方向づけをするかという様な問題を考えなければなりませんが、差当り、本年度の計画としては少なくとも三号までは発行して軌道に乗せたいと考えております。会員の皆様には一層の御協力をお願いいたしたいと存じます。

最後に、新聞の発刊という困難な仕事を御担当いただいた編集委員の方々に深く感謝いたしたいと存じます。

機関紙は必要か？

遅い発刊も好條件に——

PTAは、この国の教育の民主性を守る大切な大黒柱だといわれてきました。それがまちがいでないなら、当然PTAという団体はまずそれ自体の内側で民主的でなくてはならぬわけです。「真のデモクラシーは、人民が事情に通じている場合にのみ、かれらが公共の生活を知り、それに参与するよう仕向けられる場合にのみ存在する。」——これは或る側面からみた民主政治の原則ですが、PTAに当てはめると、つぎのようにいえるでしょう。

「真のPTAは、会員が会の事情に通じている場合にのみ、すべての会員が会員としての生活を知り、会の運営やその活動に参与できるようになっている場合にのみ存在する。」

X

広報活動のたいせつなことは、もうくだくだしくいう必要はありますまい。真のPTAの姿を保っていくために、それは忘れてならない條件ですが、ここに機関紙の効用はただ会員に組織の中央から「お知らせ」をするだけの一方交通ではありません。

個々の会員の意見が出たり応答がなされたりもするでしょう。そこにじぜん、「会員としての生活」がお互いにわかることになるし、「活動に参与」するきっかけも生まれるというものではありますまいか。

X

わたくし達は、会の結成十余年も経ってはじめて機関紙を持つことになった。たいへん遅ればせといわねばなりません。しかし、考えてみると、かえってめでたいことにも思えます。

世間一般の風習だからとか、よそも出しているからとかいうのではなくて、なが年の会の運営からその必要が痛感されて生まれた。いわば確乎たる目的をもっての発刊だからです。

この点からだけでも、充実したよい機関紙になるはずです。みんなで育てていきましょう。

X　X　X

「PTA新聞」への期待

校長　田中静夫

今回PTA会員相互の広報機関として「PTA新聞」が発刊される運びになりました。会の向上発展のため衷心よりおよろこび申し上げます。

平素PTAよりは、本校の教育活動に対し深い御関心と御支援をいただき、物心両面にわたって陰に陽に御協力いただき、日々の学校の運営が円滑に順調に行なえるよう、その態勢を整えていただいておりますことに、厚く感謝いたしております。

学校教育の推進には、学校と家庭の緊密な連繋が必要であり大切なことは申すまでもないことでありますが、学校と家庭には教育の分野に自らちがった面があり、学校は学習指導を中心とした集団教育でありますが、家庭教育は学校教育の延長でなく、独自の指導部面があるかと存じます。家庭は子供にとって身心の休息の場であると同時に、躾の場であろうかと存じます。家庭学習や家庭生活を通じ父母の愛情のこもった生活指導があり、学校教育ではできない人間性の育成の場があると思います。子供が家族の一員として自覚をもち、何でも話し合える団らんの中に、子供の考え、希望、進路等理解し合える家庭教育の特質がありますす。

本校では本年度の教育目標の一つを「自主的な態度の育成」としております。教えられる受動的な学習態度より自分で求める積極的な学習意欲を育てたい、学校や家庭での自己学習においても、クラブ活動の調整においても、自分の体位向上についても、自分で計画し自主的な責任をもってほしいと思っております。家庭でしかできない家庭教育、学校でしかできない学校教育をそれぞれの方針方向に向って押し進め、両者を関連づけることに家庭と学校の連繋の必要性があると思います。

近時中学校の教育は高等学校教育と共に問題が多くなって参りました。教育の正常化、高校大学の入試制度の改善、青少年の非行防止対策等多くの問題の渦の中で学校は学校で、家庭は家庭でそれぞれ指導の分野に応じ、子供の幸福を考え、緊密な連繋のもとに子供の教育を進めねばならぬと存じます。子供の幸福のため、御家庭相互の又学校と家庭のつながりの広場として「PTA新聞」の果たす役割は大きく、意義深いものがあることと信じます。学校といたしましてもこうした機関紙を通じ学校の方針、生徒の学習指導等項、生活指導、行事予定やその内容、クラブ活動等について御理解いただくため十分活用させていただきたいと期待いたしております。

なおこの機関紙を刊行まで運べていただきました運営委員会、学級委員会の御尽力に対し深く感謝いたします。

○　○　○　○　○

募集!!

新聞名とカット

○一中PTA会報にふさわしい愛稱をつけて下さい。

○カットは次の要領で。

・大きさ＝3cm×4cm、又は10cm×2cmの枠に入るもの

・テーマ＝自由（自作に限る）

○締切り＝九月十五日まで。

○応募先（新聞名カット共）

一中PTA新聞編集部へ郵送。もしくはもよりの編集委員へ（末尾掲載）

○皆様のあふれる機知と愛情と協力を期待しています。

「投稿」について

自由な話し合いの場をもち学び合い、知らせ合って親睦をはかって行くために、「声の交差点」欄を設けました。積極的な投稿を、お待ちいたします。

一、内容。PTAに対するご意見ご希望、随筆その他

一、投稿のきまり。

○次号〆切りは十一月五日です。

○四百字づめ原稿用紙二枚以内に。

○紙上の匿名は自由ですが原稿には住所氏名を明記して下さい。

○採否は編集部におまかせ下さい。

一、宛先

○もよりの編集委員（末尾掲載）

○箕面第一中学PTA新聞編集部

生徒相談室

お母さんがカウンセラーに ①

藤巴遷治

昨年から設けられた生徒相談室は、未だ専用の部屋はなく移動式に行っていますが、少しずつ利用されて来ています。昨年一年間で約百六十人本年四月から八十人の生徒に相談活動をしています。

「相談」といっても　生徒たちの持っているいろいろな悩みや問題を、生徒自身の力で解決していくための手助けをするだけで、出来るだけ指示や教示はしないことにしています。ややもすると、生徒たちは問題解決の速効薬を求めようとするものですが、速効薬は一時的でしかなく真の解決にはならず、安易な考え方や態度をつけさせてしまいます。問題の実体を自らが分析し、その原因がいつ頃からどうして出来てきたのか、出発点までさかのぼって考えさせ悩みや問題の姿をしっかり認識すると共にそれをどのように解決していったらよいのか話し合っている間に、生徒自身が考え出し、問題に対処していこうとする態度を示すところまで話しあうのです。

ともかく中学生は悩み多い年代です。第三者から見ればそれほど深刻ではなさそうでも、本人にすれば深刻なものです。問題の内容や傾向はちがっても、半数（悩み調査で四十九%）の者が、何等かの問題を持っています。調査に書いてない者も幾分はいるでしょう。特に男子より女子に多く又下級生より上級生に多くなっているのも、年齢的に見て一般的傾向です。精神的成長にともなう自我の拡大により自己自身に対しても、家庭や集団社会に対しても、多くの矛盾やわからぬ事に遭遇するようになるわけです。

或いは自身や家庭の要求水準との対決、性的成長にともなう問題などが基礎にあって進学就職に関する悩み、友人（異性も含めて）関係の問題、自己の性格の矛盾や欠点の意識などが複雑に入りくんで、学校に対し、親に対し、社会や家庭に対し、友人に対して、更らには、自分自身に対してきびしく対決しなければならない時代に入って来た生徒たちをいかに正しく成長させるかは、私たちだけではどうにもならないことで、保護者の皆様が、それぞれよき相談者であり、家庭がよき相談室であってほしいと思います。特に、子供さんと最も多くの時間接せられるお母さんこそ、よきカウンセラーであってほしいものです。

次回からは、単発的に書いてみたいと思っています。

榊とともに（一）

（校長、友広芳夫氏）

なが い間、一中のシンボルとして校庭にそびえ立っていた三本の榊は、昨年九月、そのうちの二本が枯れて、ついに伐り倒されてしまいましたが、年輪からみて、樹齢百八十年くらいと推定されたこの大木は、一中の二十年の歴史を、つぶさに見下ろしていたことでしょう。

PTA新聞発刊にあたり、この榊とともに、移り変わった一中や、PTAのなりたちと、歩みを、ふりかえってみることにしましょう。

一、開校のころ

昭和二十二年四月二十日、旧菫能中部青年学校々舎と、箕面小学校東館教室とを借用して開校式が挙行されました。

年度	生徒数(学級)	職員数	町予算(算中分)	保護者会及PTA予算	保護者会会長及PTA会長	備考
昭和22	(396)…八学級 478	16	397.747	242.384.88	保護者会長 之良利雅	
23	817	31	617.881	589.891.35	PTA〃〃 二秋利誠	
24	1048	38	757.137	1067.959.76	田原	
25	1065	35	1354.320	1024.521.00	下久下	
26	1067	34	2179.500	1141.523.00	坂佐々木	

（註）昭和22年度は、保護者会と称します。

入校生徒数　三百九十六名
職員数　十六名

四月二十五日、始業式があり、翌五月四日には、保護者会の設立総会がもたれています。（会長、下田利之氏）

その当時の町予算は、別表のとおり、約四〇万円となっていますが、それに対して、保護者会予算は二四万余円。

翌二十三年四月、保護者会を解散し、いわゆるマッカーサー指令としての、PTAが結成されていますから、今日につながるPTAの発足は『昭和二十三年四月十八日』となります。

この年には、町予算の約六二万円に対してPTA予算は五九万円と同額に近くふくらんでいて、この当時のPTAの性格がうかがえます。同時に、いよいよ新制中学校としての歩みが、本格化した感があります。

又、それまでの間借り教室や、二部授業は、ぼつぼつ解消できたのですが、教授用の備品など、足りないものだらけで、当時の先生方は、時にはポケットマネーで、教材を買われたこともあると回顧されています。

備品と名のつくものも、殆んどがセコハンもので、オルガン一台は、家政女学校からのゆずりもの、教授用に欠くことのできない感字版さえも役場に出かけて使わせてもらったり、成績簿や出席簿などは、北野中学校や池田中学校からもらってきたものだと、十周年記念の文集に、初代校長の友広先生が、書いておられます。

昭和二十五年十一月、三期にわけて施工された工事も、やっと完成し、全部の生徒が新校舎に移ることができるようになり、その記念に展覧会が開かれたり、初めての運動会が盛大に展開されたりした頃、PTAでも乏しい町予算を補って教育設備を拡充するために、映画会やバザーが催され、先輩会員の活躍は当時の事情を反映して、PTAと名称は変わっても内容はもっぱら、資金獲得活動であったことが語られています。

バザー出品物の中には、奇贈品の衣類、野菜をはじめ、ペルシヤ猫なども出されたとか、いつの世にも、心たのしい話題はあるものです。

そうした努力によってか、昭和二十四年からは、PTA予算も一〇〇万円を突破し、二十五年度には一〇二万円余、町予算も前年度の七五万円余に対も、一三五万円余となっています。当時の一〇〇万円は貨幣価値から考えてみても新制中学の世帯を予算面でかなり強力にバックアップしていたことをうかがい知ることができます。が、その使途は会員活動費などにふり向ける余裕はなかったようです。

随筆　花の寺　—夏—

麻殖生　和

法然院の須弥壇の散華

銀閣の南、鹿ヶ谷の法然院は、谷崎潤一郎が、生前からお墓を作っていた事でも知れる様に、竹数に囲まれた幽邃な静浄境だが、本堂の須弥壇の散華の美しさは、一度見た者の忘れ得ぬものだろう。阿弥陀仏を安置する仏座の下の広い須弥壇の上に、二十五菩薩に供えるお花が、その数だけ一輪一輪、直に、放射状に整然と飾られている。季節によって、椿の大輪の時もあり菊の時もあり、蕨やつつじの花の時もある。今頃なら、木蓮の花が供えられている。飾られた数十ケのあわい白と紅の筒型の花は、鏡のような黒漆の須弥壇の上に影を写し、無数の花が散っているようで目をうばう美しさだ。平等院や法界寺の壁画にある二十五菩薩の極楽の音楽が本当に聞えて来るようだ。

中でも、梅雨の頃の紫陽花の鮮華の妖しい美しさは忘れることが出来ない。色の移ろい変わる紫陽花の花は濃く淡く、須弥壇にうつり、又その反映が花に映え、無限に屈折する水色の変化と陰影を作り本当に夢幻の美しさであった。しばらくは息もつけぬ程その絶妙の色の旋律の中で陶酔境にさまようことができる。

芳春院の桔梗

大徳寺山内塔頭の芳春院に一面桔梗だけが植わっているお庭がある。洛中のお庭の中には珍しい木や、貴重な花の咲く立派なお庭が多いが、この一面桔梗だけという庭も忘れ得ない情趣の一つだ。

七月の末頃から八月の初め相当な広さの庭いっぱいに、藍紫や、白の、切り根細工のような桔梗の花が、ちょっと風に吹かれている。

真夏のま昼のいきれの中に、涼しげで美しいけれど、何故かさびしい風情だ。白い風が吹きぬけて行くような、儚げな情感が胸にしみる。秋を思うからだろうか。仏教の無常の空しさが伝わって来るからだろうか。

忘れ得ない花の寺の一つだ。

声の交差点

近藤芳治

（一）自己本位だ、公徳心がない。頽廃りが足りないなど、それが現代っ子の通弊のように印象づけられているのは、まことに残念である。或る中学校で生徒が先生を殴ったそうだが、中学校が無法者の社会のように聞えてくるのではなかろうか。

（二）教師も親も高校進学を目指して、勉強偏重であることは、確かのように思う。良い成績をとり、よい大学を出ることがよい就職をするための必要条件であることも間違いないようだ。然しオフィスや工場で期待される青少年達は頭でっかちの香才ではないことも事実のようだ。明朗、活発で、思いやりとか、苦しさを自分で買ってやるような男気、休まないで会社に通う健康な青年を待ち望んでいるのが実状のように思う。

社会の底辺で黙々と自分の仕事を果たすことのできる、そのような少年達を育てることが中学校の大切な教育であろう。

（三）昔の少年も今の少年達も、皆それ程大きなちがいはないと思うが、ラッパの吹き方には、その時代によってちがいがあると思う。「現代の少年の理想」をかかげてやることは、先輩である大人達のつとめではなかろうか。中学時代は親の言う事よりも、教師や友達の言う事を受け易く、その中で、自分の人間としての鍛練を重ねて行く特徴があると思う。勉強だけでなく、教師と生徒の人間的な触れ合いが持たれることも希望する。

（四）非行少年の率が増えていることも事実で、勉学偏重とか、大人が子供への訓育を怠ったとか、いろいろの理由があろう。

自己を自覚して、これらの機会に進んで参加し向上するべきである。

渡辺愛美

小学校入学の時と違った不安をいだきながら一中PTAの一年生となった。そこには意見がのべられ、きいてもらえる方法をご考慮いただきたい。

○予算以内で安易平穏な一年を過すのでなく、必要なことは（考えればいくらでもあると思う。例えば、実験、実調等）勇気と決断をもって実行して頂き度い。

○文化後援会の性格が曖昧でよく分らない。独立させなくても、会の中にあってもその役目は果せるように思う。会員の殆んどの方が、PTA活動より以上に本会に対して冷淡であるときいています。会員に還元してもらうために収めているのではありませんから、使途の面を教育設備に充用して頂き度い。

○心身ともに成長度の高い中学三年間を、十分に勉学できるよう配慮することが、私共の大切な義務だと思います。

例えば、三学年は、進学就職問題等、二年はクラブ活動、保健問題等、決してむつかしい研究ではなく、身近かな事柄で、関心の深い問題をとりあげ、検討し、少しづつでもその結果を会報に発表するようにしては如何でしょう。

それにしても、P（父母）の方は三年で子供の卒業と同時に退会です。残るT（先生）が、雑用が多く困って居られるのに、あまり負担がかかるようではお気の毒です。Pの方でも、役員委嘱などの意志によると言下達方式ではなく各一人一人の声なき声を集めてそれを、発言と公表の場である会報に、大いに生かして全会員が親身になって読む会報にして頂きたいと思います。

尼寺和子

○会員がPTA活動に対して冷淡ではなかろうか。

本来の意味するところの責任を果すべく、努力しなくてはと思う。そのためには率直に

渡辺愛美

あろう。

当然なことだが、吾々大人の姿勢を正すことが必要と思う。ニニへ来て頬の赤らむ私である。

大野英子

猛暑も三十七度を越えてふき出す汗のようには出てこないのが文章です。

此の度PTA会報が、意欲的な企画の下に発行されますことは、本当によろこばしいことと思います。が投稿依頼となると、依頼する方も大へん、まして、それる身にもなるとどうしても尻ごみされるのも無理ないことです。

そこで一つ提案ですが、各学年別に何かテーマを決めおいて、それに対する意見を募集したらどうでしょう。

あとがき

機関紙を持とう、というねがいをみのらせる役目の重大さを思いながら、第一号をつくりあげました。

中学校のPTAとしては機関紙がありさえすればよいというわけのものではないのですが、ともかく、横につながる一助にと、なるべく会員の直接の声を、紙面に出すために『声の交差点』欄もとりました。

創刊号であることと、折から夏休みに入ったため、原稿を頂く手段に恵まれず、意をつくしませんでしたことをお詫びします。

次号はふさわしい紙名をつけて頂いて充実したものを出し度いと思います。

本年度編集委員
麻殖生　和
馬場　豊子
秋山　園子
松井島栄子
堀　愛子
吉田富美子
秦畑　喜子
土屋　純